

作庭「龍門瀑」(改定版)

庭の傾斜地を利用した龍門瀑の作庭です。竜門の滝は中国夏王朝の頃に造られたと言われている三段の瀑布です。この滝を登りきった魚は竜となって天に昇るとの「登竜門」の故事からこのような形の滝を「龍門瀑」といわれています。下の写真は石組み完成時の写真に役石名を記したものです。



実際に竜門の滝が存在したかどうかは写真も現物も見たことがなく、ここでの石組みはあくまで想像と創作の産物です。龍門瀑は宋より帰化した蘭溪道隆禅師に始まり、夢窓疎石がその形を作り上げ、禅の修業に用いられたようです。

古(いにしえ)から現代に至るまで様々な作庭家や庭師が龍門瀑を造っており定石はある程度備えてはいるものの、それぞれの形を持っていることから見れば、各師の想いによるものと考えます。龍門瀑は本来三段の滝で構成されるものですが、簡素化され一段のものも多いようです。右の写真は京都金閣寺庭園の『龍門の瀧』です。

龍門瀑の一番の定石は滝の流れに逆らって天に昇ろうとする鯉の姿を現した鯉魚石(りぎょせき)です。金閣寺の龍門の瀧でも大きな鯉魚石が配されています。

また、龍門瀑は枯山水の石組みにも多く見られ大徳寺(大仙院)龍門瀑が知られています。



金閣寺の龍門の瀧



慶沢園の龍門瀑



宿の庭で見かけた龍門瀑

上左の写真は大阪慶沢園(住友家茶白山本邸庭園、明治41年木津聿斎(きづつさい)の設計で京都の名庭師・小川治兵衛の手により着工、大正7年完成)の龍門瀑です。上右の写真は奈良県南部の古い宿の庭で見かけた龍門瀑です。『龍門瀑』の故事は寺社のみならず、豪商から庶民の間まで大切にされていたようです。

今回の作庭では、途中の護岸には碧巖(へきがん)にちなんだ石組みを行なっています。

石組みの碧巖石は禅門書の「碧巖録」に記された問答から石組みに組み込まれるようになったもので、問答にちなんだ役石です。

碧巖石は大きな岩壁の前を鳥が飛び交う様を思い浮かべる役石を配します。また猿石として猿たちが岩場で戯れる様子を思い浮かべる石を配します。

1. 作庭アウトライン

作庭前の地形は右の写真のように傾斜した場所です。一番高いところには小さな既設のブロック積土留めがあります。

吐水部はこの既設ブロック積の前に龍門瀑の滝石組みを行います。滝は龍門三級の滝に見立て三段の滝とします。あと二段の滝を設(しつら)えるために、写真手前左へ流路を延ばし、Uターンすることにより遣水(やりみず：庭園内の水の流れ)の長さを伸ばします。また、途中の護岸には碧巖(へきがん)にちなんだ石組みを行います。

三級の滝を流れ下った水は、更に最後の滝を落ち、貯水槽へと流れ込みます。流れ込んだ水はフィルターを通し、ろ過したのち、ポンプで循環させます。



施工前現況

2. 作庭作業



水循環の配管を施工



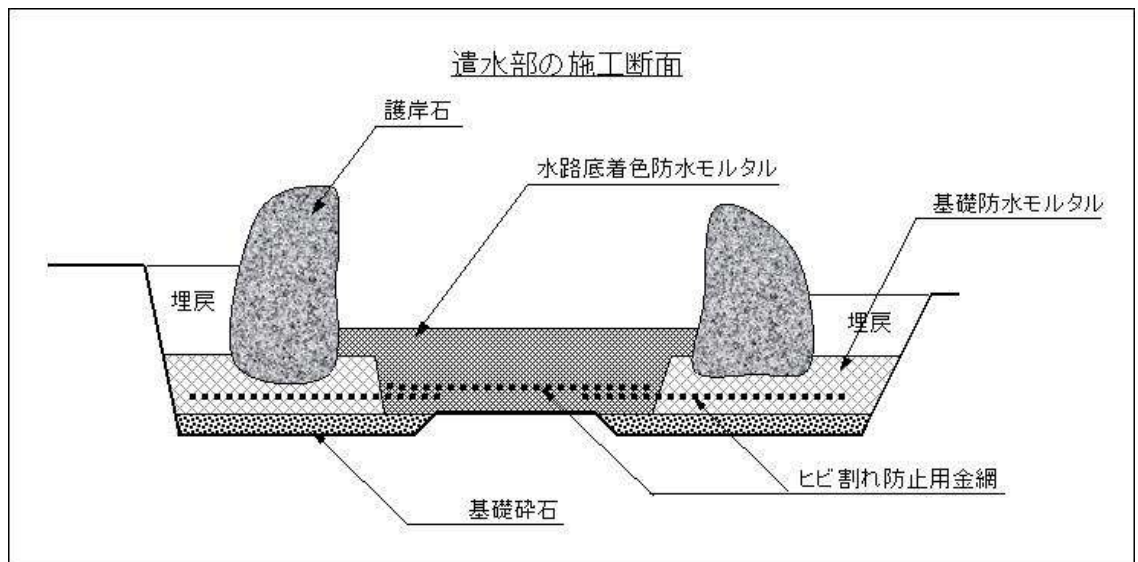
滝口部分の石組み仮組

水を循環させるための配管を行い、滝口部分の石組みを仮組します。石組みには火山岩を使用しています。

石組みの形が決まったら一旦解体し、基礎を作り順次モルタルで固定します。遣り水部も同様に仮組を行なった後、基礎を作り順次モルタルで固定します。各基礎モルタルはひび割れ防止に金網を入れておきます。(次頁図参照)

流れがUターンするところから下流側は穏やかな流れを表現するため、水路底のモルタルが硬化する前に表面に粗い砂を撒き、洗い出し風に仕上げます。

石と石の間は顔料で黒く着色した防水モルタルで目地仕上げをします。目地は見えるところは深目地にして自然の風合いを出します。隙間の大きいところは火山岩の小石を詰めてから目地を仕上げます。



滝石組みの目地詰めが終わったら試験通水を行い、不良箇所を手直しします。

滝石組み周囲の配石と植栽を行い龍門瀑の完成です。

この後、滝を鑑賞するための滝見台とそこへ登るための飛石階段、清めのための蹲踞の設置、竹垣の設置を行っています。

3. 作庭の説明と仕上がり写真

滝見台は土留めをサビ御影で行い、座禅石風に石張りをし、普段はベンチを置いて、お茶を楽しめるように茶台用の台石を置いています。



通水試験



滝見台



飛石階段

飛石階段や延べ石は大和サビ石を使用しています。



蹲踞



竹垣（随流垣）



俯瞰全景

蹲踞には循環水でなく、水道水を利用し実際に手を洗うのに使えるようになっています。

竹垣は手前から滝に向かうにつれ高さを低く設え、遠近感を出すようにしています。

竹垣の胴縁には垂木を使用し、立子は真鍮釘止めとし、随流垣※に仕上げています。

(※ 四ツ目垣の応用型)



石組み全景



鯉魚石（滝を登る鯉を表現）

石組みの中には石梁（石の橋）や陰陽石も配しています。



石梁



ポンプ室・貯水槽と配電盤（山門風模型）

こげ茶の木目調コンクリート板の下にポンプ室があり、ポンプ(150W、130 l/min)を据えています。

山門風模型の中はポンプに電力を供給するための配電盤が入っています。ポンプはタイマーで設定した時間に動き、滝が流れるようになっています。



陰陽石（陽）



龍門瀑 番人蛙



陰陽石（陰）

4. 完成からその後

龍門瀑は一応の完成を見ましたが、その後手を加えたところについての説明です。

1) 立簾垣の設置

竹垣(随流垣)の背面にあるポリカ製の柵が見えないように、目隠し用に立簾垣(たてすがき)を設置しました。立簾垣はホームセンターなどで売られている立簾を切って木枠にはめ込んだものです。



立簾垣設置前

2) イワヒバ植栽

イワヒバ※を石組みの間に植えました。下の写真はイワヒバを植え付けた滝部です。右下の写真はイワヒバの拡大写真です。

イワヒバのおかげで、一層と滝が深山にある風情が出ました。

(※ イワヒバはイワヒバ科のシダ植物で、イワマツとも呼ばれています。乾燥状態では枝を巻き込んだような形になりますが、水分が補給されると暫らく後に元に戻ります)



立簾垣設置後



イワヒバを植栽した龍門瀑



イワヒバ



イワヒバ(乾燥状態)

以上